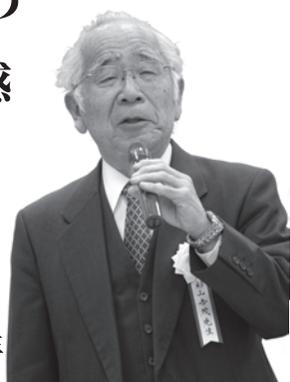


審査委員の

講評・所感



杉山吉茂先生

受賞された先生方、おめでとうございます。先生方の論文を読ませていただいて大変感銘を受けました。実践されていることはもちろん立派ですが、文章も大変立派だったと思います。お手本になるのは実践内容だけではなく、文章の構成力なども参考になると思います。皆さん、ぜひ読んでいただければと思います。

私は数学教育を担当していますが、算数・数学というと、どうかすると計算の仕方や問題の解き方を覚えて問題に対する答えを出せばそれでいいといった具合に考えて、それを分かり易く丁寧に説明をする、あるいは教科書に沿ってそれを分かり易く説明していればいいと考えられておられる先生方も多いのですが、私はもっと創造的な学習をしてほしいと思っています。

例えば分数の割り算では、割る数を分母と分子をひっくり返してかける。「それはどうしてですか」と言われて答えられる人はそんなにはいない。「決まりでしょうか、何かで決まっている、誰かが決めたのでしょうか」というぐらいに考えて「決まり」だからと覚える。決まりに従って計算すればいいのだから、となる。

例えば教科書には書いていませんが、分数の掛け算では分母と分母をかけたのだから、では分数の割り算は分母と分母を割って分子と分子を割ればいいはずと考える子どももいるはずなのです。ですから、本来ならば私はそう考える

子どものほうに目を向けてほしいと思うのです。分子と分母をひっくり返してかけるというのは、なぜそうなのかという子どもの自然な発想を大事にすれば、子どもと一緒に創造的な学習ができるはずです。そして、それは1時間の授業だけではなく、それが構成できるようなカリキュラムを作ることも大切なことだと思います。

単に、1時間の授業をどうするのかということを考えるだけではなく、以前にどのような学習をしているかということも非常に大事であり、それが後になって生きるといふことをどこかできちんと教えておくということも大切です。ですから、指導法と同時にカリキュラムも大事にするような実践がこれからはもっと出てきてほしいと思っています。多くの先生方は教科書に従って、いろいろな工夫をこらして実践される。それはそれでいいのですが、もっと素朴なものを大事にするような実践が出てきたらいいなあと思います。

もう一つ、国際的な調査などでは、日本の数学は点が取れるけれども使えない、応用力がないということも言われます。これも数学教育の抱える大きな問題の一つですが、授業と同時にカリキュラムなどを工夫してこうした課題に応える実践力や応用力が、想像力を育むような算数・数学の論文が出てくることを期待したいと思います。

この贈呈式にお越しになっていらっしゃる先生方にも、今後の期待を含めて講評を終わらせていただきます。先生方、おめでとうございます。

審査委員の講評・所感



武内 清先生

簡単に感想と、受賞の方々にお祝いを申し上げますと思います。

231編と多くの応募があった中から、厳正な審査で選ばれた皆さんの論文は、大変優れたものです。そして、感じますことは、それらには共通した点があるということです。

第1に、教育の現場というのは、大変複雑ないろいろな要素が混在しているわけですが、その中から今問題になっている点、大切な点を的確に抽出し、何をどのようにすればよいのかということをはっきり示しているもの、そして、明快に書かれたものが選ばれています。

今の時代の教育に大切なことの一つに、逆境にめげない強い心やお互いをいたわる絆であることが、中学校の阿部一彦先生の「女川町のふるさと創造」、小学校の佐久間充先生の「山田町の『学校の宝』を活用した復興教育の推進」などから分かります。

第2に、選ばれた論稿は、その取組、教育実践がとても優れたもので、実践者の高い教育力と教育技術の卓越性が伺えます。それは、今の教育現場や子どもの現状にしっかり根差したもので、理想だけでなく現実的なものです。その教育技術や方法が、他の学校やクラスの模範となることでしょう。

第3に、2とも関連しますが、仮説の検証がきちんとしたデータによって裏づけられているものが選ばれています。例えば、小学校の牧逸

馬先生の「理科の授業づくり」ですが、様々な工夫した理科の授業の後、児童の理科好き、実験や観察好きが大きく上昇したことがデータで示されています。また、小学校の佐藤美和子先生の「いのちを大切にする子供を育てる保健教育」でも、授業後にいのちの大切さを実感する児童が大幅に増えていることがデータで示されています。ただ、影響を与えているものには隠れたものがあり、表に現れた要因は擬似相関という場合もありますのでご注意ください。どんな教育方法でも教員が熱心に行えば、それに子どもは感化され変容します。子どもが変わったのは、教育方法のせいなのか、教員の熱心さのせいなのかの見極めが大事です。

以上の3点以外にも、まだ優れた点は、他の先生方のご指摘のようにあると思いますが、この選ばれた論文が公表され、日本全国の教育実践の模範となることにより、日本の教育の向上が確実に図られると思います。このような論文を投稿された先生方に感謝するとともに、お祝いを申し上げます。

審査委員の講評・所感

谷川彰英先生



受賞者の先生方、おめでとうございます。私はこの東書教育賞以外に某新聞社の教育賞の審査も担当していますが、東書教育賞の応募数の多さとレベルの高さを非常に痛感しております。

数年前から、韓流ドラマが随分日本に浸透し

ておりました、私はどんなものか、一度見たことがありました。その時にかなり私はいい意味での衝撃を受けた場面がありました。おそらく「イ・サン」という作品だったと思うのですが、将来王様になるイ・サンは幼い時にいろいろな教育を受けるのですが、ある時、師匠の先生から「学問は何のためにあるのか」と質問されたのです。私は彼が何と答えるのかなと思ったのです。私たち学者の世界で生きてきても「学問は何のためにあるか」という問いに的確に答えられる人はなかなかいないと思うのです。ところが、その小さな4～5歳の男の子はこう言ったのです。「分けることです」と。私ははじめは意味が分かりませんでした。「分けること」とはどういうことなのかというと、彼は「学問ができるということは、ある意味で恵まれた環境にある。それをできなかった人のために分けていく、つまり自分が獲得した知識や能力を周りの人たちに分けていくことなのだ」と言うのです。私は教育学者としても、非常に感銘を受けたという記憶があります。

つまり、簡単に言うと研究成果というのは「分けること、シェアをする」ということなのだと思います。皆さんの研究論文は大変高い評価を受けて231人の中から選ばれたわけですが、その選ばれた実践の蓄積をもっと現場に向けて広げて行っていただきたいと思うのです。

とかく、いろいろな賞をもらいますと、自分が特別の評価を受けたと思ってしまいがちです。学者の場合もそうですが、いい論文を書きました、いい評価を受けました、結局それは自分ひとりのものだと考えてしまいがちなのです。

しかし、何のために今教育をするのかという問題意識を持つと、日本の学校教育を推進していくための重要な資料としてそれは最終的には日本の子どもたちや、現場の先生方に向けて、皆さんの成果を活用していただくように広く発信していただきたいと思うわけです。

先生方はこれからまた新たな研究を始められると思いますが、難しく言うと「教育哲学」な

のだと思います。教育哲学というものが今、日本の教育界からほとんど消えてしまったと私は思っています。教育哲学は難しく見えるけれども、「何のために教えるのか」ということです。社会科を何のために教えるのか、数学を何のために教えるのか、あるいは保健体育を何のために教えるのか、そのことを考えていく中で本当に自分たちの役割が見えてくるのではないかと思います。

これからも、ぜひ頑張ってくださいと思います。本日は、おめでとうございます。

審査委員の講評・所感



壺内 明先生

第30回という記念すべき年に受賞された先生方、おめでとうございます。

本日受賞されました先生方は、学習指導要領の趣旨を踏まえて、子どもたちのために多くの時間を費やして授業改善に努められ、実践研究論文としてまとめられました。私からは、中学校の部について感想を述べさせていただきます。

最優秀賞の宮城県気仙沼市立唐桑中学校の阿部一彦先生、おめでとうございます。先生は、「1000年後の命を育む生徒の育成」というテーマで、東日本大震災発生の一か月後に入学した64名の生徒との3年半にわたる実践を教育論文としてまとめられました。社会科の授業で、東日本大震災規模の巨大津波から、人々の大切な命を守る対策案を考えさせ、生徒たちから三つ

の案が提案されました。その中で最も実現させたいものとして、「記録を残す」ということで、辛く、悲しい体験を「石碑の建立」と「教科書作り」を自分たちの力でやろうと決心し、活動がスタートいたしました。「1000年後の命を守るため」を合言葉に100円募金を始め、町内の全浜に津波からの避難を呼びかける「命の石碑」を建立する具体的な取り組みが、私たちの胸を強く打ちました。この活動が全国そして世界へと広まり、「命の教科書作り」までに発展させたことは、生徒によりよい社会づくりに貢献しようという態度を育てた素晴らしい教育実践活動であります。

次に優秀賞の大分県佐伯市立佐伯中学校の石田周一先生、昨年の奨励賞に引き続いての受賞、おめでとうございます。国語科の授業を通して、「学びやすい」「学びたくなる」「学び続ける」の三つの柱を基盤として、その有用性について検証を進め、多くの成果を挙げられました。見通しが持てる授業、板書の工夫、掲示物の工夫、言葉かけ、活躍の場の保障などを重視して、学習の流れや到達点を授業の始めに知らせる重要性や「学習記録用紙」の活用で学習内容の定着が図られることを実証しました。さらには、授業開始時の「スピーチ学習」の導入、校内掲示板を活用した「ことばの広場」「小中連携の語彙指導」を通して、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」に一定の成果を挙げたことは大きな収穫であります。どうぞ、今後とも継続して実践研究を続けられますよう期待しています。

同じく、優秀賞の岐阜県教育委員会美濃教育事務所の薄田茂樹先生、おめでとうございます。思考力、基礎力、実践力を重視した21世紀型能力を意識化した授業の転換で、真正のパフォーマンス評価に着目して実践を進められ、成果を挙げられました。図形楽譜を取り入れた批評や動画を取り入れたループリックの提示、多様なパフォーマンスによる批評などを実践することによって、一段高い学力形成が図られることを示していただきました。表現領域でも、動画ルー

ブリックが生徒のパフォーマンスの質的向上につながっていることを明らかにされました。パフォーマンス評価を取り入れた音楽の授業展開は、ループリックや動画ループリックによって課題解決に意欲的に取り組めることを実証し、21世紀型学力形成に結びつく大きな成果であります。今後のご活躍を期待しています。

最後に、特別記念賞の滋賀県守山市教育委員会教育研究所の中西一雄先生、2年前の奨励賞に引き続いての受賞おめでとうございます。PISA調査で重要視されている「科学的能力」や「科学に対する態度」の育成に焦点をあてて研究を進められ、「科学的探究プログラム」の開発に取り組みされました。四つの活動段階を枠組みにして、3回の科学的探究活動プログラムを実践して、理科学習に対する動機づけや将来志向性を高める上で効果があることを立証していただきました。また、理科に関心が低かった生徒ほど、科学的探究活動プログラムを体験させることが大切であることも明らかにしていただきました。今後とも、さらなる検討や修正を加えて継続研究をすることを願っています。

結びに、受賞された先生方の益々のご健勝とご発展を祈念して感想とさせていただきます。本日は、誠にありがとうございました。



審査委員の講評・所感

東原義訓先生

私はICTに関わる論文を読ませていただき

ました。先程、赤堀先生から三つの論文のご紹介がございましたが、特に特徴的なものとして、一人1台のタブレットの活用に関することを少しお話しさせていただきます。

一人1台のタブレットの活用は、ここ数年、今回の受賞論文の他にもいくつかの活用実践例が発表されてきています。それらが国の方針に大きな影響を及ぼしたことをご紹介させていただき、皆様のお祝いの言葉に変えさせていただきますと思います。

私が今感じていますことは、二つあります。最近文部科学省は「学力の三要素」という言葉を使うようになりました。学校教育法の30条2項に「基礎的な知識及び技能の習得」、二つ目に「課題解決のために思考力、判断力、表現等を育む」、三つ目に「主体的に学習に取り組む態度を養う」ことが挙げられています。このような学習にとっても便利なのが、一人1台のタブレットの活用ではないかというところにつながっているように私は感じています。そこに大きな影響を及ぼしているのではないかと感じています。

もう一つは先ほどご紹介もありましたとおり、学習指導要領の改訂が中教審に諮問されたところですが、教育内容だけではなく学習方法や評価にまで言及する可能性が出てきており、この学習方法というところに焦点が当たってきたことにも大きな影響を与えたのではないかと想像しています。

学び方を変えていくのは、育成すべき力が違うために学び方を変えていかなければならないという要素と、同時に一人1台タブレットを使った学び方が今までとは違う児童の力を育てるということを実証することができたものと思います。そういう意味でも、今年の受賞は国の新しい教育に対する施策に影響を及ぼすことができたと思っています。本日は、本当におめでとうございました。

審査委員の講評・所感



三上裕三先生

本日は、栄えある第30回東書教育賞を受賞されました先生方に心よりお祝い申し上げます。

現在、中央教育審議会において今世紀2度目の学習指導要領改訂に向けての審議が進行中です。今年は教育制度や内容等に関する改革が急ピッチで進められ、今後の教育動向が一層注目される年となることと思います。

そのような中で、東書教育賞は第30回という記念すべき年を迎え、テーマも新たに「未来を担う子どもと共に歩む確かな教育実践」と設定されました。グローバリゼーションの進展する中で、創造力を発揮してたくましく生き抜く子どもの育成を目指しています。新しいテーマのもと、小学校の応募数もわずかながら増えてきていることは大変喜ばしいことです。

私は、小学校部門を中心に感想を述べさせていただきます。

まず、最優秀賞を受賞されました鹿児島市立南小学校の牧逸馬先生、おめでとうございました。一般に理科離れの子どもが増えているという指摘がされる中で、「理科好きを育てる授業づくりと環境づくり」と題するテーマのもと、先生は理科専科として着任した学校で授業の工夫はもちろんのこと、理科好きの子どもを一人でも増やすために環境づくり等に熱意をもって取り組まれ、優れた成果を挙げられました。

授業実践の一例を紹介すると、5年生の「魚のたんじょう」では、メダカの卵を解剖顕微鏡

で観察する学習です。その観察の仕方に工夫があります。同じ日に生まれた卵を全員が同じように観察するのではなく、意図的に生まれた日がそれぞれ異なるメダカの卵を六つのグループで観察することによって、卵の成長の様子をはっきりとらせることができるなど、子どもが卵の誕生に興味を持って学習できるための様々な工夫がなされています。

また、子どもたちの理科に対する意識調査によると、着任された4月の調査では、「理科の学習がきらい」あるいは「実験や観察がきらい」と答えた子どもがそれぞれ6割いたのが、1年後の3月の調査では、それぞれ「好き」と答えた子どもが8割を超えている結果を見ても、教師の指導の在り方によって子どもは大きく変わることで、また子どもはもともと理科嫌いではなく、感動体験を伴った理科の学習を求めていることが分かります。他校の先生方にも参考にさせていただきたい大変分かりやすい実践です。

次に、優秀賞を受賞されました福岡教育大学附属福岡小学校の佐藤美和子先生は、養護教諭の立場から「いのちを大切に育てる子供を育てる保健教育」と題するテーマで実践をまとめられました。先生は、これまで小・中・高での勤務経験があり、約3000人の子どもたちとの出会いを通して、心身に課題を抱える多くの子どもたちと接してこられました。この貴重な経験から、命の大切さに真に気づいていない子ども、自分の心や体を大切にできていない子どもがいかに多いかという切実な課題のもとに、様々な実践を工夫されました。つまり、保健学習での「いのちの学習」を、保健指導では「ハートタイム」と称する命を感じる心を育てる本の読み聞かせを、また保健日よりや掲示板を活用して子どもたちの五感に訴えるような情報を工夫して提示するなど、子どもの自尊感情を高めることにも意を用いた指導を通して、命の大切さを子どもの心にしっかりと意識づける実践を継続し、大きな成果を挙げられました。

次に、優秀賞を受賞されました香川県三豊市

立仁尾小学校の山下昌茂先生は「食育を通した低体温解消へのチャレンジ」のテーマで特別活動や総合的な学習での実践をまとめられました。学校全体で病欠者が多いのは低体温が原因の一つではないかとの仮説のもとに、全校児童の体温測定の結果、平温以下の子どもの割合が76%という高い数値に驚き、全校挙げて運動・睡眠時間の確保と食育の実践に取り組みされました。2年間の実践で低体温児童の割合は17%までに減り、多かった欠席者も当初の3分の1にまで減り、インフルエンザ罹患者も251人から19人になりました。さらに、小児生活習慣病や発達障害の症状まで改善された実践報告にあります。

校長先生がリーダーシップを発揮され、教職員や保護者、児童の意識まで変える優れた実践であり、全国の学校においても大いに参考となるものと思われます。「校長が変われば学校が変わる」と言われる典型のような気がします。

特別記念賞を受賞されました岩手県山田町立大沢小学校の佐久間充先生も同じく校長先生であります。東日本大震災の被害を受けた勤務校において、子どもたちに未来の地域社会を創造する逞しい意欲を育てるため、「学校の宝」である全校児童による表現劇「海よ光れ」を教育活動の中心に据え、学校・保護者・地域が一体となって取り組んでこられた感動的な実践であります。特別記念賞に相応しい内容であると思います。

教育の進展は、一日も休むことのない日々の実践の積み重ねによってもたらされます。次回も、より多くの先生方の応募を期待して感想といたします。